

きべりはむし

第12巻 第1号

目 次

兵庫県のコメツキムシ(1)	岸井 尚 1
兵庫県のゼフィルス採卵紀行(1)	勝屋 潤 15
兵庫県におけるアオドウガネの分布	高橋 寿郎 19
兵庫県未記録のオオキノコムシ	遠山 雅夫 25
出石郡糸井溪谷におけるマヤサンコブヤハズカミキリの記録	小田中 健 25
上ヶ原用水路のトンボ	田中 稔 26
西宮市内におけるヒメコブヤハズカミキリの採集記録	新家 勝 28
宝塚市清荒神のチョウ(追録 3)	加藤信一郎 29
宝塚市内におけるカメムシ2種の採集および目撃記録	新家 勝 30
宝塚市売布でエゾナガヒゲカミキリを採集	小田中 健 30
嗚呼舞子ビラ — シルビアシジミの産地消滅 —	勝屋 潤 31
メスアカムラサキ神戸市で発生	勝屋 潤 32
神戸市垂水区東舞子町のナガサキアゲハ	勝屋 潤 32
県関係文献紹介	33
会 員 異 動	33

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1 9 8 4 年 5 月

兵庫県のコメツキムシ (1)

岸 井 尚

関西地方には甲虫類の研究者、あるいは趣味として蒐集する人が極めて多いが、府県単位でそのファウナがまとめられた例が少ない。特に同定の困難なコメツキムシ類は、甲虫類中でも大きなグループに属するにかゝらずそのようであり、Kishii(1966)の京都のもの、的場・平松(1973, 1974)、平松(1977)による和歌山のものがある位で、他は特定地域のものがあるに過ぎない。

兵庫県については、Candèze(1873)のLewis採集標本による模式産地となった種が多く、本邦のコメツキ類が正式に分類学の祖上にのった最初の地の一つでもあり、比較的多くの特定小地域からの記録や、断片的報告はあるが、まとまったものは見当たらない。筆者(1963)はかつてやはり高橋寿郎氏の御好意により、42種の本科を記録したが、その後主として但馬地方のものについて高橋匡(1964, 1975a, b, c, 1976, 1978, 1982)が多くの種を記録した。この中で“但馬地方昆虫目録(予報第7報)”(1982)にその集大成とみなされるリストとして計78種のものが報告された。今回筆者は高橋寿郎氏の御依頼で、広く県下から同氏により蒐集された資料の調査をしたが、この機会にこれ迄の記録も可能な限り網羅し、又筆者所有の兵庫県下未記録種についてはそのデータを含めて以下にこのリストを作製したものであり、その結果126種のものが本県に分布することが判明した。これは京都府及び新潟県の略160種、和歌山県の140種に次ぐもので、福岡や岡山・栃木諸県の略130種に匹敵する種数となるが、隣接する京都や岡山と比較すると当然分布するはずの種で未発見のものがかなりあり、今後の調査では京都と略等しい種数は分布するものと思われる。

リストはStibick(1979)の見解に従がう配列としたが、一部筆者の考えを入れた所もある。又、従来の記録はその発表者(発表年)を今回の資料データの後に附したが、詳細なデータは省略した。なお資料データは採集地、頭数、(採集年月日)の順で記し、採集者名のないものはすべて高橋寿郎氏の採集によるもので、その詳細な採集地は下記の通りである。

文末になり極めて失礼であるが、資料面及び文献蒐集の上で多大なお世話を頂いた方々、特に今回の調査資料の恵与及び多くの文献類を快くコピーして頂き、かつ発表の機会まであたえられた高橋寿郎氏には厚く感謝するものである。又、石田 裕氏、水野弘造氏、高橋 匡氏及び渡辺昭彦氏にも資料面あるいは文献面で貴重な援助をいただき、こゝで心からの謝意を表するものである。

慶野松原(三原郡)、三草山(川辺郡)、妙見山(川西市能勢)、宝塚(宝塚市下佐曾利)、再度山・烏原・道場・木見・藍那・下谷上・長待山・山の街・太山寺(神戸市)、妙法寺・白川(神戸市須磨)、屏風浦(明石市藤江)、畑(加西市)、三谷・鳥羽・白山(多可郡)、砥ノ峯・笠形山・川上(神崎郡)、家島(飾磨郡)、三瀬山(相生市)、福知溪谷・水谷・原・赤西・音水・坂ノ谷(宍粟郡)、西紀町(多紀郡)、須留ヶ峯(朝来郡)、城崎(城崎郡)。

Subfamily PITYOBIINAE Hyslop

ヒゲコメツキ亜科

Tribe Pectocerini Gûrjeva

1. *Pectocera (Pectocera) fortunei fortunei* Candèze, 1873

ヒゲコメツキ

鳥原, 17 exs. (21. V, 1976; 17. VII, 1976; 22. V, 1979; 25. V, 1979; 23. V, 1980; 29. V, 1980; 5. VI, 1980; 7. VI, 1980; 11. V, 1981; 15. V, 1981; 19. V, 1981; 16. V, 1982; 6. VI, 1982; 1. V, 1983; 25. V, 1983; 5. VI, 1983; 26. VI, 1983), 妙法寺, 2 exs. (23. V, 1979), 家島, 1 ex. (26. V, 1978), 須留ヶ峯, 1 ex. (9. V, 1975. 遊摩正秀採), 三濃山, 1 ex. (20. V, 1973), 城崎, 1 ex. (17. V, 1970)。Candèze (1873. 模式標本), 戸澤 (1936), 山本 (1958), 岸井 (1963), 高橋 匡 (1964. 1975a, 1982), 西脇 (1965), 堀田 (1976. 1978a), 仲田 (1978. 1982), 上田 (1981)。

Subfamily PYROPHORINAE Candèze

サビキコリ亜科

Tribe Agrypnini Candèze

2. *Agrypnus (Agrypnus) binodulus binodulus* (Motschulsky, 1861)

サビキコリ

鳥原, 4 exs. (29. IV, 1969; 23. V, 1971; 30. IV, 1972; 1. V, 1981), 三濃山, 3 exs. (3. V, 1969; 7. V, 1972; 18. V, 1974), 音水, 3 exs. (31. V, 1972; 21. V, 1972; 11. VI, 1972), Candèze (1873), Harold (1876), Heyden (1879), 三輪 (1935), 戸澤 (1936. *binodulatus* と誤記), 山本 (1958), 岸井 (1963), 辻 (1963), 高橋 匡 (1964, 1975a, 1982), 西脇 (1965), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 堀田 (1976. 1978a.b), 有本 (1977), 仲田 (1978, 1982), 木下 (1982)。

3. *A. (A.) cordicollis* (Candèze, 1865)

ムナビロサビキコリ

福知溪谷, 1 ex. (3. VI, 1975. 遊摩正秀採)。岸井 (1963), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1982)。

珍しい種類ではないが、兵庫県下での採集例は比較的少ない。

4. *A. (Sabikikorius) fuliginosus* (Candèze, 1865)

ホソサビキコリ

Heyden (1879), Miwa (1934)。各地に多い種であるが、これも又本県下からの記録は40年以上前のもののみである。筆者の所蔵するものに下記のものがあるので記録しておく。

Mt. Asaka in Hyogo, 1 ex. (12. VII, 1948, 高橋史樹採)。

5. *A. (Colaulon) scrofa scrofa* (Candèze, 1873)

ヒメサビキコリ

鳥原, 11 exs. (9. III, 1975; 31. VII, 1977; 3. IV, 1983; 5. IV, 1983), 三谷, 1 ex, (2. VIII, 1975), 慶野松原, 1 ex. (26. V, 1983)。Miwa (1934), 山本 (1958), 岸井 (1963), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975c, 1982), 仲田 (1978, 1982)。

6. *A. (C.) hypnicola* (Kishii, 1964)

コガタヒメサビキコリ

高橋 匡 (1975a, 1982)。基本標本産地の京都木津川河原からは極めて多くの個体が得られているが、それ以外の地域では少ない。現在確実な分布地は新潟・石川・千葉・愛知・京都・大阪・兵庫・和歌山・岡山・島根・徳島・福岡・熊本の諸県である。従来の記録では屢々本種の種名として "*hyponicola*" を用いる例が多いが、これは誤りである。

7. *A. (C.) miyamotoi tsukamotoi* (Kishii, 1956)

ハマベオオヒメサビキコリ

大平・有本 (1976), 高橋 匡 (1982)。従来の記録では姫路市浜田海岸及び美方郡浜坂町からの報告をみるのみであるが、筆者の所有標本中に淡路島からのものがあるので下記しておく。

姫口浜, 13 exs. (31. III, 1977, 渡辺昭彦採)。

8. *Adelocera (Brachylacon) difficilis* (Lewis, 1894)

シロオビチビサビキコリ

三濃山, 1 ex. (20. V, 1973)。岸井 (1963), 高橋 匡 (1976, 1982)。兵庫県からは従来 *microcephalus* の種名で報告されたものである。いわゆる照葉樹林の葉上にみられる。

9. *Lacon (Alaotypus) maeklinii maeklinii* (Candèze, 1865)

オオサビコメツキ

Lewis (1894), 山本 (1958), 山本・高橋 (1962, *nakanei* として記録しているが, これは明らかな誤記であろう), Kishii (1966), 堀田 (1978), 仲田 (1978, 1982)。

Tribe Chalcolepidiini Lacordaire

10. *Paracalais berus* (Candèze, 1864)

ウバタマコメツキ

鳥原, 8 exs. (5.V, 1968; 5.VI, 1980; 7.VI, 1980; 13.VI, 1980; 22.VI, 1980; 22.VI, 1980; 26.VII, 1980; 25.V, 1982), 妙法寺, 1 ex. (20.II, 1979), 慶野松原, (26.V, 1983)。Harold (1876), Heyden (1879), 戸澤 (1936), 山本 (1958), 堀田 (1959, 1976), 岸井 (1963), 高橋 匡 (1964, 1975c, 1982), 仲田 (1978, 1982), 上田 (1981), 高橋寿郎 (1981), 登日 (1982)。

11. *P. larvatus pini* (Lewis 1894)

フタモンウバタマコメツキ

再度山, 1 ex. (20.VI, 1979), 鳥原, 3 exs. (24.V, 1979; 17.VI, 1980; 19.VII, 1980), 宝塚市武庫川町, 1 ex. (8.VI, 1981, M. Ninomi leg.)。野村 (1938), 野崎 (1942), 黒佐 (1955), 山本・高橋 (1962), 高橋 匡 (1975c, 1982)。従来 *Alaus putridus* 又は *A. pini* として報告されていたものであるが, 最近は上記種名が用いられている。

Tribe Hemirhipini Candèze

12. *Tetrigus lewisi* Candèze, 1873

オオクシヒゲコメツキ

鳥原, 1 ex. (5.VIII, 1980)。Lewis (1894), Miwa (1934), 山本・高橋 (1962), 高橋 匡 (1964, 1978, 1982), 仲田 (1978, 1982)。

Tribe Conoderini Fleutiaux

13. *Aeoloderma agnata* (Candèze, 1873)

マダラチビコメツキ

三草山, 1 ex. (5.VII, 1980), 鳥原, 3 exs. (28.VI, 1974; 5.VI, 1976; 8.IX, 1976), 木見, 1 ex. (23.VI, 1980), 畑, 3 exs. (29.VI, 1974)。山本 (1958), 岸井 (1963), 高橋 匡 (1964, 1975a, 1982), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 仲田 (1978, 1982)。

14. *A. brachmana* (Candèze, 1859)

スジマダラチビコメツキ

大平(1965)。南西諸島及び東南アジア各地に広く分布する暖地性海浜性種であり、四国の松山市及びMurozumi(?)からも若干の報告があるが、本州からの記録としては神戸市からの上記のものがあるのみであり、勿論本種としては最東北限分布となる。

Subfamily HYPNOIDINAE Schwarz ヒサゴコメツキ亜科

Tribe Hypnoidini Schwarz

15. *Colioascerus saxatilis* (Lewis, 1894)

ヒラタクロコメツキ

大河内, 1 ex. (4. VI, 1977)。山本(1958)。北海道から九州までの各地で河川の河原から知られているが、兵庫県からの記録は少ない。

16. *C. fluvialis* (Lewis, 1894)

キアシヒラタクロコメツキ

鳥羽, 1 ex. (29. IV, 1972)。前種と同様の環境に棲息するが分布は前種より少ない。本種は兵庫県下未記録種である。なお共に雄の後翅は退化して飛行不能である。

Subfamily DENTICOLLINAE Reitter ペニコメツキ亜科

Tribe Athouini Candèze

17. *Kibunea eximia* (Lewis, 1894)

ムラサキヒメカネコメツキ

鳥原, 1 ex. (12. V, 1983)。美しい上翅をもつ本種は本県下初の報告例となる。

18. *Gambrinus atricolor* (Lewis, 1894)

クロカネコメツキ

鳥原, 1 ex. (2. V, 1971)。山本(1958)、仲田(1978, 1982)。関東地方から九州まで分布地が知られているが、多いものではない。

19. *G. rufipennis* (Lewis, 1894)

ハネアカカネコメツキ

音水, 2 exs. (21. V, 1972, 11. VII. 1972)。山本(1958)、奥谷(1974)。近畿地方では比較的よく採集されているが、他地方では少ないようで、愛知、岡山、徳島、福岡、熊本から報告されているのみである。

20. *G. vittatus* (Lewis, 1894) タテジマカネコメツキ

長待山, 1 ex. (7. V, 1982), 砥ノ峯, 1 ex. (15. VII, 1977)。Candèze (1873, 模式標本), 山本 (1958), 岸井 (1963), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975a, 1982), 有本 (1977), 高橋寿郎 (1978), 仲田 (1978, 1982)。邦産カネコメツキ類の最普通種である。

21. *Nothodes marginicollis* (Lewis, 1894) ウスチャイロカネコメツキ

高橋 匡 (1975a, 1982)。青森から大分県まで分布域は広いが個体数は少ない。

22. *Athousius humeralis* (Miwa, 1927) カタアカホソコメツキ

岸井 (1963), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975a)。分布域は広いが, 近畿地方では現在本県下からのみ知られているにすぎない。

Tribe Denticollini Reitter

23. *Denticollis miniatus* (Candèze, 1885) ミヤマベニコメツキ

鳥羽, 2 exs. (29. IV, 1972; 1. VI, 1975), 川上, 1 ex. (7. V, 1977), 原, 3 exs. (21. V, 1979), 音水, 7 exs. (4. V, 1972; 21. V, 1972; 11. VI, 1972; 13. V, 1973; 21. V, 1979), 赤西, 2 exs. (27. V, 1979)。山本 (1958), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975a, 1982), 高橋寿郎 (1978)。これまでの記録はすべて *scutellaris* の種名でなされているが, これは上記種のシノニムとされ, 従来 *miniatus* と同定報告されていたものは次種である (Ohira, 1973)。

24. *D. nipponensis* Ohira, 1973 ベニコメツキ

槻並, 5 exs. (4. V, 1979), 白山, 1 ex. (3. V, 1973), 鳥羽, 1 ex. (1. VI, 1975), 川上, 2 exs. (7. V, 1977; 18. VI, 1977), 福知溪谷, 1 ex. (3. VI, 1975, 遊摩正秀採), 音水, 7 exs. (21. V, 1972; 13. V, 1973), 赤西, 2 exs. (27. V, 1979), 坂名, 1 ex. (9. VI, 1973)。Miwa (1934), 戸澤 (1936, *minatus* と誤記), 山本 (1958), 岸井 (1963), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975a, 1982), 仲田 (1978, 1982), 高橋寿郎 (1978), これらの記録の多くのものは *minatus* の種名でなされたものである。

Tribe Hemicrepidiini Champion

Subtribe Hemicrepidiina Champion

25. *Scutellathous suturalis* (Candèze, 1873)

ホソチャイロツヤハダコメツキ

Candèze (1873, 模式標本), Lewis (1894), 岸井(1963), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982), 仲田(1982)。

26. *S. comes comes* (Lewis, 1894)

チャイロツヤハダコメツキ

近畿地方からは京都でのみ従来報告されているが、筆者の所有標本中に本県から得られた下記のものがあるので記録しておく。前種とよく似ているので或はそれと混同して発表されてその可能性もある。

六甲～有馬, 1 ex. (10. Ⅶ, 1955, 石田裕探), 氷ノ山, 2 exs. (25. Ⅶ, 1955, 石田裕探)。

27. *Harminathous nakanei* Kishii, 1955

フトツヤハダコメツキ

岸井(1963), Kishii (1966), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982)。少ない種であるが、本県下からの記録例は他地方に比して多い。

28. *Harminius (Harminius) singularis nihonicus* Kishii, 1979

ニホンムネスジダンドラコメツキ

辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974)。従来記録されている種が上記種であるか否かいさゝか疑問の点もある。或は *galloisi* が混入しているかも知れない。

29. *Stenagostus umbratilis* (Lewis, 1894)

オオツヤハダコメツキ

辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982), 有本(1977), 仲田(1978, 1982), 木下(1982)。

30. *Hemicrepidius (Hemicrepidius) desertor* (Candèze, 1873)

ヒメクロツヤハダコメツキ

砥ノ峯, 2 exs. (15. Ⅶ, 1977; 23. Ⅶ, 1977), 三潁山, 1 ex. (6. , 1973), 水谷, 1 ex. (17. Ⅶ, 1981), 音水, 5 exs. (30. Ⅶ, 1972; 15. Ⅶ, 1973)。Lewis (1894, 1895), Miwa (1934), 中根・岸井(1955), 山本(1958, *subcyanus* として記録),

岸井(1963), 辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982), 堀田(1976), 高橋寿郎(1978)。邦産コメツキムシの中で最も色彩変異の多い種類でこれまで発表されたものでも14異常型が知られている。　　その中で前背板の完全に黒いものはほとんどが *virens* とされるもので、この名で独立種又は var., ab. などとして発表された例が多い。

31. *H. (H.) terukoanus* (Kishii, 1961)

チャバネツヤハダコメツキ

高橋 匡(1975b, 1976, 1982)。対馬, 徳島県剣山及び兵庫県氷ノ山, 扇ノ山に局所的に, しかも希ならず得られるが, 他の地域では福井・和歌山・熊本の諸県から少数知られるにすぎない。前種 *desertor* の異常型に *brunneipennis* とされるものがあり, これと極めてよく似た色彩をもつが, 触角基部数節の特徴と他の形態的差異で区別できる。

32. *H. (H.) secessus secessus* (Candèze, 1873)

クロツヤハダコメツキ

鳥原, 7 exs. (8. VII, 1973; 12. VI, 1976; 4. VII, 1980; 7. VI, 1982; 11. VII, 1983), 明石市, 1 ex. (26. VI, 1977), 鳥羽, 3 exs. (5. VII, 1975), 砥ノ峯, 5 exs. (15. VII, 1977; 23. VII, 1977), 水谷, 1 ex. (17. VII, 1981), 音水, 1 ex. (16. VII, 1972), 坂ノ谷, 3 exs. (22. VII, 1979)。Candèze (1873, 模式標本), Harold (1876), Miwa (1934), 山本(1958), 岸井(1963), 辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982), 有本(1977), 高橋寿郎(1977), 仲田(1978, 1982)。

33. *H. (Medakathous) jactatus jactatus* (Lewis, 1894)

ルリツヤハダコメツキ

砥ノ峯, 1 ex. (23. VII, 1977), 音水, 1 ex. (16. VII, 1972)。岸井(1963), 高橋 匡(1976, 1982)。属名として *Medakathous* が長く用いられていたが, 別属にするほどの差は少ないと思われる(Kishii, 1977)。高橋 匡(1975a)は *Althous inornatus* (?)を報告したが, これは本種のことと思われる。

34. *H. (Miwacrepidius) subcyaneus* (Motschulsky, 1866)

メダカツヤハダコメツキ

中根・岸井(1955), 山本(1958), 岸井(1963), 高橋 匡(1964, 1975a, 1982), 有本(1977), 仲田(1978, 1982)。 *praenobilis* の種名で発表された例も多い。

Tribe Ctenicerini Fleutiaux

35. *Anostirus (Ipostirus) daimio* (Lewis, 1894)

ダイミョウヒラタコメツキ

辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1976, 1982)。

36. *Acteniceromorphus kurofunei* (Miwa, 1934)

ミヤマフトヒラタコメツキ

本県下からの記録はみられないが、筆者の手本に下記の標本があるので記録しておく。

Sasabe in Hyogo, 1 ex. (3. VI, 1966, 水野弘造採)。

37. *A. chlamydatus* (Lewis, 1894)

ベニバネフトヒラタコメツキ

高橋 匡(1975a, 1982), 仲田(1982)。高橋 匡及び仲田の記録では *Actenicerus* 属となっているが、これは明らかな誤りである。

38. *Corymbitodes concolor* (Lewis, 1894)

クロホソヒラタコメツキ

音水, 3 exs. (21. V, 1979), 赤西, 3 exs. (21. V, 1979; 27. V, 1979)。北海道から九州まで各地で寧ろ普通に得られる種であるが、本県下では上記のものが初の記録となる。

39. *C. gratus* (Lewis, 1894)

ドウガネヒラタコメツキ

鳥原, 3 exs. (11. V, 1975; 24. IV, 1981; 8. V, 1981), 藍那, 3 exs. (4. IV, 1979; 10. V, 1979), 三濃山, 1 ex. (18. V, 1974), 坂ノ谷, 1 ex. (9. VI, 1973)。岸井(1963), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1976, 1982), 有本(1977), 仲田(1978, 1982)。

40. *C. nikkoensis* (Jakobson, 1913)

ベニホソヒラタコメツキ

辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982)。

41. *Actenicerus pruinus* Motschulsky, 1861

シモフリコメツキ

三濃山, 2 exs. (3. V, 1969; 18. V, 1974)。Miwa (1934), 山本(1958), 岸井(1963), 辻(1963), 西脇(1965), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982), 有本(1977), 高橋寿郎(1978), 仲田(1978, 1982)。

42. *A. yamashitai* Ohira, 1968

ホソシモフリコメツキ

大河内, 1ex.(7. V, 1977), 音水, 1ex.(21. V, 1972)。高橋 匡(1975a)。主な棲息分布域は関東山地以北で東北地方に多いが、近畿地方でも北部山岳地帯に分布しており、北但地方はその西限地となる。

43. *A. aerosus* (Lewis, 1879)

コガタシモフリコメツキ

大河内, 1ex.(7. V, 1979), 赤西, 1ex.(10. V, 1970)。前多・他(1974)。本種は前種とは逆に近畿地方を主たる分布域として、しかも互によく似ているので同定の難しい点がある。又前多・他(1974)の記録せる種が本種であるか否か極めて疑わしい

44. *A. orientalis* (Candèze, 1889)

オオシモフリコメツキ

藍那, 2exs.(5. VI, 1978), 三濃山, 1ex.(18. V, 1974), 赤西, 1ex.(10. V, 1970)。岸井(1963, *akitu* として記録), 辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a), 有本(1977), 仲田(1978, 1982), 岸井(1980)。木下(1982, ヒメシモフリコメツキとあるのは本種と思われる)。

45. *A. modestus modestus* (Lewis, 1894)

ヘリアカシモフリコメツキ

山本・高橋(1962), 辻(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982)。

46. *Eanoides puerilis* (Candèze, 1873)

シリプトヒラタコメツキ

山ノ街, 1ex.(29. V, 1976), 笠形山, 1ex.(12. VI, 1975)。山本・高橋(1962), 高橋 匡(1975b, 1982), 有本(1977), 仲田(1982)。

47. *Calambus mundulus* (Lewis, 1879)

クロツヤヒラタコメツキ

音水, 1ex.(21. V, 1972)。奥谷(1974)。北海道から九州まで広く分布し、かつそんなに珍しい種類でないが、本県下での記録は極めて少ない。

48. *Neopristilophus serrifer serrifer* (Candèze, 1873)

アカヒゲヒラタコメツキ

辻(1962), 岸井(1963), 辻・岸田(1972), 奥谷(1974), 仲田(1978, 1982), 高橋 匡(1982)。

49. *Selatosomus (Selatosomus) onerosus* (Lewis, 1894)

トラフコメツキ

Miwa (1934), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1982)。

50. *S. (S.) vagepictus* (Lewis, 1894)

ウストラフコメツキ

中根・岸井 (1956), 岸井 (1963), 奥谷 (1974), 仲田 (1978, 1982), 高橋 匡 (1982)。

51. *Paraphotistus notabilis notabilis* (Candèze, 1873)

オオヒラタコメツキ

山本 (1958), 西脇 (1965), 奥谷 (1974), 仲田 (1982)。

52. *P. praenobilis* (Lewis, 1894)

クロオオヒラタコメツキ

坂ノ谷, 1 ex. (9. VII, 1973)。この記録は兵庫県最初のものとなるが、前種の記録中に本種が含まれる可能性もあるものと思われる。

Subfamily ELATERINAE Leach コメツキ亜科

Tribe Ampedini Fleutiaux

53. *Penthelater plebejus* (Candèze, 1873)

コナガコメツキ

三輪 (1935), 山本 (1958), 岸井 (1963), 高橋 匡 (1964, 1982), 仲田 (1982)。

54. *P. robustus* (Kishii, 1966)

フトナガコメツキ

Kishii (1966, 模式標本)。本県下からは原記載時猪名川町及び香住町からの2頭の標本が副模式標本として用いられているが、その後の記録はない。記載時他に新潟・岐阜・京都・滋賀・大阪・徳島からも報告されたが、それ以後では門脇・藤村 (1977) が島根県から、門脇 (1978) が隠岐ノ島から記録した位である。前種によく似ているが、触角基部数節の特徴及び、雄生殖器構造の著しい違いで判別は困難でない。

55. *Haterumelater bicarinatus bicarinatus* (Candèze, 1873)

チャイロコメツキ

Lewis (1894), Miwa (1934), 三輪 (1935), 山本・高橋 (1962), 岸井 (1963),

高橋 匡 (1964, 1975a, 1982), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 有本 (1977),
仲田 (1982)

56. *Ectamenogonus rugipennis* (Lewis, 1894)

アラハダチャイロコメツキ

山本・高橋 (1962), 高橋 匡 (1964, 1982), Kishii (1966)。分布域は広いが少ない
種で, 灯火に集まる例が多い。

57. *Ischnodes sanguinicollis* (Panzer, 1793)

ムネアカクロコメナツ

山本・高橋 (1962), Kishii (1966), 高橋 匡 (1975a, 1982)。ヨーロッパの中, 北
部を原産地とする美しい種で, 本邦からは山形・福島・神奈川・京都・兵庫・福岡の 6 府県からの
み知られているにすぎない。兵庫県下では春日町, 豊岡市, 扇ノ山から得られているが, 京都の例
ではケヤキの樹皮下で成虫越冬していることが多い。

58. *Pseudelater carbunculus* (Lewis, 1879)

ヒメクロコメツキ

北宝塚, 1 ex. (13. V, 1983), 鳥羽, 1 ex. (29. IV, 1972), 三瀬山, 1 ex. (6. V,
1973), 音水, 4 exs. (31. V, 1970; 21. V, 1972; 11. VI, 1972), 城崎, 1 ex. (17.
V, 1970)。岸井 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975a, 1982)。
有本 (1977) 高橋寿郎 (1978), 仲田 (1978, 1982)。

59. *Ampedus (Lewisiellus) gracilipes* (Lewis, 1894)

ミヤマタテスジコメツキ

高橋寿郎 (1978)。岩手県から福岡県まで広く分布するが, 個体数は極めて少ない。本県でも
大河内からの上記の報告があるのみである。

60. *A. (Ampedus) orientalis* (Lewis, 1894)

アカコメツキ

高橋 匡 (1975b, 1982)

61. *A. (A.) optabilis* (Lewis, 1894)

オオアカコメツキ

赤西, 1 ex. (21. V, 1979)。山本・高橋 (1962)。前種によく似た種で同定を誤り易い種
である。

62. *A. (A.) fagi* (Lewis, 1894)

アカアシアカコメツキ

山本・高橋(1962), Kishii(1966)。柏原町からの記録があるのみであるが、近畿北部山岳地で珍しいものではない。

63. *A. (A.) vestitus vestitus* (Lewis, 1894)

ケブカクロコメツキ

Kishii(1966), 仲田(1978, 1982)。高橋 匡(1982)。

64. *A. (A.) tenuistriatus* (Lewis, 1894)

ホソクロコメツキ

音水, 1ex.(31. V, 1970)。高橋 匡(1975b, 1982)。本県からの報告例はほとんどないが、近畿地方全般にむしろ個体数の多い種である。

65. *A. (A.) aureovestitus* Kishii, 1966

キンモウクロコメツキ

高橋 匡(1975a, 1976, 1982)。前種に極めてよく似ているが、毛色及び上翅間室の状態が異なる。しかし多数個体を検すると判定の困難なものもあり、両性生殖器構造でも同様でこれらは同一種かも知れない。この点については別の機会に明らかにする所存である。

66. *A. (A.) hypogastricus hypogastricus* (Candèze, 1873)

アカハラクロコメツキ

鳥原, 1ex.(14. V, 1972), 道場, 1ex.(13. IV, 1974), 妙法寺, 1ex.(28. V, 1978), 鳥羽, 4exs.(29. IV, 1972; 5. VII, 1975), 大河内, 2exs.(7. V, 1977; 4. VI, 1977), 三濃山, 4exs.(3. V, 1969; 6. V, 1973; 28. IV, 1974), 原, 1ex.(11. V, 1979), 赤西, 1ex.(10. V, 1972), 音水, 6exs.(4. V, 1972; 21. V, 1972; 11. VI, 1972; 13. V, 1983), 西紀町, 3exs.(20. IV, 1982)。三輪(1935), 山本(1958), Kishii(1961), 岸井(1963), 久松(1973), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1982), 堀田(1978b), 高橋寿郎(1978), 仲田(1978, 1982)。

67. *A. (A.) japonicus japonicus* Silfverberg, 1977

アカアシクロコメツキ

山本(1958), 奥谷(1974), 高橋 匡(1975a, 1976, 1982)。従来の記録で *A. (A.) rufipes* とされていた種である。

Tribe Megapenthini Gurjeva

68. *Procræus (Agaripenthes) helvolus* (Candèze, 1873)

ヒメホソキコメツキ

妙見山, 11 exs. (30. Ⅶ, 1982)。Lewis (1894)。本県下では Lewis 以来の記録となるが、分布域も北海道から九州まで広く、そんなに珍しい種でもない。

69. *Gamepenthès ornatus* (Lewis, 1894)

コキマダラコメツキ

坂の谷, 1 ex. (22. Ⅶ, 1979)。岸井 (1963), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975c, 1982)。

70. *G. versipellis* (Lewis, 1894)

メスアカキマダラコメツキ

坂ノ谷, 1 ex. (22. Ⅶ, 1979)。山本 (1958), 岸井 (1963), 辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1975a, 1982)。

71. *G. pictipennis* (Lewis, 1894)

キマダラコメツキ

高橋 匡 (1975c, 1982)。本州中北部の山岳地に分布中心があり、本県は本州では西限分布地となる。

72. *Megapenthès opacus* Candèze, 1873

ムネアカツヤケシコメツキ

Candèze (1873, 模式標本), Lewis (1894), 山本・高橋 (1962), Kishii (1966)。美麗かつ珍しい種であるが、基本標本産地である本県下からの記録は他地方に比し多い。

73. *Hayekpenthès pallidus pallidus* (Lewis, 1894)

ホソキコメツキ

辻 (1963), 辻・岸田 (1972), 奥谷 (1974), 高橋 匡 (1982)。

(コメツキ亜科 未完)

兵庫県ゼフィルス採卵紀行 (1)

勝 屋 潤

1. 美方郡美方町

(1) 1982年11月13日

午前5時起床。新聞によると日出は6:30。まだ1時間半もある。やたら寒い朝である。朝食をとらずにエンジンをかける。第2神明、加古川バイパス、姫路バイパスから播磨有料道路に入る。今年から生野まで延びている。ここで夜明を迎える。本日の天候晴れ。国道312号線から9号線へ出る。関宮町を通過し、八井谷峠を越えると美方郡下に入る。村岡町を北上し春來峠の手前で南下すると美方町である。美方高原、小代等のスキー場が多い。沢沿にウラジロガシが目につくようになる。西側の斜面は紅葉が美しく、その中にこんもりとした深緑のカシがよく目立っている。

A.M 9:00 車を止めてあたりを散策。大規模な伐採が行なわれ、スギとヒノキの植林が進んでいる。東側斜面を見て歩く。一面に伐採され上部の尾根沿にかろうじてウラジロガシの大きな木が残っている。よく見るとこの斜面伐採された跡にウラジロガシとクルミのひこ生えがたくさん出ている。伐採前は当り一面に自生していた様である。

岩と伐採されて放置されている樹木の枯木の間を登る。斜面がきつくても岩や樹木の根際に足をかけて登るのはさほど困難ではないが、このように伐採された跡が放置されているとズブズブと足がめり込み非常に登りにくい。やっとの思いで尾根筋に出てみたが花芽をつけているような勢いのよい木はなく、幹径がせいぜい5～10cmのことが多い。

ひこ生えを見るがヒサマツの卵は見当らない。やはり登らねばならない。1.5mも登れば空間に張り出した枝の頂芽の廻りに、たわいなく卵は見つかった。この枝から4卵採り、その上の枝に足をかけたらメリッと嫌な音と共に折れてしまった。この枝をノコで払い、この木をおりる。改めて木の下でゆっくりと卵を捜す。一応ついているのでホッとする。通常休眠芽の基部の裏側に1卵ずつ、時々2卵。但しこのツインの場合、卵と卵がくっつくようにして産付されていれば同一母蝶のようだが、少し間隔があれば異なる母蝶によって産付された可能性が高い。

通常裏側であるが、枝によっては曲がりくねって表が地面に向っているものがあり、こういう場合、表に産付される事が多いので、一応両面に注意せねばならない。中には3卵というのがあり、ツイン+1卵となっているので、これも複数の母蝶の可能性が高い。この枝でおもしろかったのは芽のない枝先に2卵と硬い葉裏の基部に1卵が見出された事であった。この木では割と寄生卵が多い。廻りの木が伐採によりなくなった為、直接日光にさらされるようになり、それだけ寄生率も高くなるのであらうと思われた。ヒサマツの場合、卵寄生を受けると、他の卵のように

横に穴があいているのは少なく、卵の上面半分がほとんどなくなっているが多い。持っておりた枝を見終えると他によさそうな木もないので斜面を下る。途中にヤマザクラがあったが、メスアカはついていない。山道にまでおりるとオニグルミが多く自生しており、オナガシジミの卵はかなりついてる。オナガの場合は食樹の休眠芽の基部に5割、小枝の分岐部に5割の割でついてるが、分岐部にはまとめて産付されている事が多いようである。しかしオナガは食樹の関係上、飼育が困難であるのであまり採らないようにした。

少し休息して西側の斜面に取りつく。花芽の木を捜すが見当たらないので、適当に登り易そうな木を選んで樹上に腰をおろす。真横に張り出した枝の基部に5cmぐらいのひこ生えが1本生えており、その先の休眠芽が白くなっているのが見えた。よく見ると、なんとアイノのツインである。ヒサマツより1廻りも2廻りも大きくトゲトゲが肉眼でもよくわかる。全く汚れておらず真白である。ウラジロガシでアイノが採れるとは聞いてはいたが、みたのは初めてであった。

この木にもヒサマツは割に見られたが、中には貧弱な芽にヒサマツ4卵とアイノ1卵がくっつくように産付されていたのもあった。しかし、アイノはやはり少い。

ヒサマツはある程度採れたので、今度はミズナラを捜し出してアイノに挑戦しようと思うが、大木はなく幹径がせいぜい15cm程度のものしかない。

アイノは上の方に採卵するので登らねばならないが、この木は斜めに斜面の下方に向かって伸びており恐いので、軟弱にもやめてしまう。ひこ生えからはやはり休眠芽の基部にジョウザンが1卵ずつ産卵していた。どちらかというジョウザンよりエゾを採りたいので、幹や枝の分岐部を見るが、そう何もかもうまくいかない。

しかし、やっと1卵。(と思ったが、後に羽化したのはオオミドリの♂であった。)

道に戻り、車をさらに走らせると樹相は一変し、ブナが多くなった。しかし溪流の斜面が急な上にブナはどでかい大木で手も足も出ない。ミズナラとサクラもみられるが、時々、車を止めてみる程度では何もついていない。そろそろ腹も減ってきたし、Uターンし帰路につく。本日、天候にも恵まれ、いい一日であった。

本日の成果

ヒサマツ	65卵 (ウラジロガシ)
オナガ	8卵 (オニグルミ)
ジョウザン	5卵 (ミズナラ)
アイノ	5卵 (ウラジロガシ)
ミズイロオナガ	1卵 (ウラジロガシ)
アカ	1卵 (ウラジロガシ)
オオミドリ	1卵 (ウラジロガシ)

(2) 1983年10月30日

1年ぶりにまた美方町を訪れた。今日はこの付近に用事があり、蝶に無関係の友人(会社の友人)と共に昼過ぎに到着した。友人も1度採卵とやらをやってみたいと言うのでヒサマツを採ろうということになった。実はこの友人、私の標本箱からヒサマツを10頭ばかり持って帰って部屋に飾っている。

時間もないので、昨年場所までは行けない。道沿の楽なウラジロガシを捜すが、さすがにこんな所によい木は残っていない。やはり尾根に向って斜面をヤブこぎする事になった。友人は途中でカキを取っているの、ほっといて1人で登る。ウラジロガシはあちこちにあるが、例によってよい芽をつけた木はほとんどない。

仕方がないので貧相な木に登る。木の上で芽を見るが、さすがについていない。いいかげん嫌になっていると友人がやっと登ってくる。その友人の顔を見た直後に最初の1卵が見出された。下で待ってる友人に卵のついていそうな枝を選んで1本投げおとす。彼は一生懸命に芽を見ている。その間に私の方も次々に卵は見つかった。昨年のようにアイノヤミズイロはついていない。ヒサマツの方もツインが1個だけであとは全部シングルである。

木をおりと友人が数卵見つけていた。差し出された卵を見てアッと思った。

Favonius / まさしく Favonius の卵が1卵ウラジロガシの休眠芽についている。オオミドリかジョウザンか? 区別はつかない。残念な事に寄生されている。

なぜウラジロガシに? これは別に考える様な問題ではなかった。私の登ったウラジロガシのすぐ横にミズナラがあり、木の上で交錯している。恐らくミズナラに産卵していたジョウザンが誤ってウラジロガシにも産み付けたものであろう。試しにこのミズナラを調べると、やはりジョウザンがベタベタついていて。例え誤認産卵だとしても珍しい記録である事は間違いない。

一応採れたので早々と引き上げる。足がガクガクしている。帰路サクラとオニグルミを見るが今年はない。美方町一帯はメスアカの記録はあるが、どうも私はここでは採れないみたいである。

本日の成果

ヒサマツ	26卵 (ウラジロガシ)
ジョウザン	19卵 (ミズナラ, ウラジロガシ)

2. 大栗郡一宮町～波賀町

(1) 1982年10月30日

山崎インターから29号線を北上する。山崎町から一宮町に入ると安積橋はすぐである。本日の目的は揖保川水系のヒサマツ、メスアカである。

安積橋から進路を右にとる。まず福知溪谷でのメスアカの採卵を手がける事にした。最近の福知溪谷はキャンプ場等のレクリエーションセンターを増設すべく、いつも何らかの工事が行なわれているようである。入口で車を止め山道を登ってゆく。ここはメスアカで有名なので、採卵者も多く入っているようで、道沿のヤマザクラの下枝はほとんど切られてしまって、いい木が見当らなくなってしまった。それでも山道から少しはずれると川沿にはまだまだヤマザクラは多く、ひこ生えのみで楽に採卵できる。最も多いのは細枝の分岐部の廻りである。通常1卵ずつ産付されているのが多く、2卵もかなり多い。木に登る必要はほとんどない。

山道を登りつめていくとキンキマメザクラがよく目につき、特にこれを好むのか小さな木でもかなり産卵されている。

本日はI氏と2人で30卵ずつ採卵したら別の産地に行こうということになっていたの、適当な所で折り返す。車を止めてある近くまで下ってきた時、オニグルミがあったので立止る。オニグルミは折れ易いので私は登りたくないと思っていたらI氏が身軽にもスルスルと登った。枝を1本払って下に落す。この場合、芽を痛めないように切口を下になるようにうまく落とす必要がある。期待していなかったが、この枝にオナガの卵はついていたのである。オニグルミの芽は大きいので、1本の枝でも数える程しかなく、こんな調子で芽を折っていったらすぐに芽のない木になりかねないので、オナガの採卵はすぐに止める。

1つの芽に3卵というのが1つあったが、あとは芽や分岐部に1～2卵ずつである。

車に乗り込み、福知を後にし、さらに上流に行く予定であったが、進路を変更して波賀町に向うことにした。途中、イモが道にころがっており、秋であることをしみじみと考えさせられる。「イモふかし、タバコふかせば、秋深し」。

途中でオナガを採ったり、遅い昼食をとったりしたので時間を食ってしまい、赤西溪谷に着いたのは16:00近くになっていた。秋の山道の日没は早い。17:00になると、もう卵は見えなくなる。残された1時間を我々はウラジロガシを捜す事にかけて。川沿にウラジロガシは点々とあるが、芽それも良い芽のついている木は少なく、まして花芽となると仲々見つからない。

日暮も間近、やっと1本、ついでいそうな木を見つけ調べる。木は大きく芽の状態も大変良いが卵は非常に少ない。二人で必死にみてもわずかしかついていない。

気がつくあたりは真暗になっており、枝の一部を車に積んで帰路につく。翌日調べたら1卵ついていた。

本日の成果

メスアカミドリ	82卵 (ヤマザクラ, キンキマメザクラ)
オナガシジミ	25卵 (オニグルミ)
ヒサマツミドリ	13卵 (ウラジロガシ)

(2) 1983年10月23日

本日は矢野郡の公文、小原地方のメスアカが目的である。福知であれだけ採れるのであるから一宮町一帯にはまだまだ多産地は多いはずである。ところがあいにくの雨である。アクセルを踏む右足が重い。車の窓越しにヤマザクラを捜し、道沿のものだけ調べる事にする。公文あたりではウラジロガシ、マンサク、コメラに混ってヤマザクラも多い。目ぼしをつけた木には少しずつついている。

午後からは大雨になり、外に出られない。P.M 3:00

P.M 3:00 1本のヤマザクラより実に17卵からなる卵塊が見つかった。太枝の分岐部である。少し離れた所からみると真白に見えるのですぐわかる。メスアカの17卵塊は非常に珍しく、私は初めてである。せいぜい2卵~4卵塊しかみたことがなかった。しかし、こういうのに限って(つまり、人に見つかり易いものは)寄生バチにも見つかりやすく、内15卵が寄生されている。それにしてもゼフィルス(ゼフィルス)の卵塊の数のデータを集めればおもしろいではなからうか。

コナラからはダイセンが1卵見つかったのみであった。

本日の成果

メスアカミドリ 49卵 (ヤマザクラ)

ダイセン 1卵 (コナラ)

(1983. 11. 23記)

兵庫県におけるアオドウガネの分布 (兵庫県甲虫相資料・144)

高橋 寿郎

山手短大、田中 梓教授が1983年8月26日の神戸新聞自然随筆欄で神戸のポートアイランド南公園でヤマモモをはじめ各種の樹木に群がってヤマアオドウガネが葉を食っていたと書いておられた。早速筆者も同年9月5日南公園に行ってみた。ヤマモモには注意して見たがこの虫を見付けることは出来なかったが、丁度咲いていたハギ(ミヤギノハギ?)に可成りの数の個体を見た。公園であるから網を持って行っていなかったが、害虫駆除と手でもって25♂♂ 13♀♀を採集して持って帰った。帰宅後交尾器を摘出して詳しく調べて見たが、筆者が採集して帰ったものは全部アオドウガネと断定すべきものであった。田中教授との観察時期が違うので此の公園にはヤマアオドウガネと両方いるのかもしれない。ところでアオドウガネの方が県下にどの様に分布しているのか、筆者の手許にそ

こそこの資料があるので、一応県下に於ける分布状況について概説させて頂き度いと思う。中田隆昭氏も「阪神地方のアオドウガネ」に就いて報告されているので(Crude, № 23, 1982)参考にさせて頂いた。

Anomala albopilosa (Hope, 1839)

アオドウガネ

本種は F.W. Hope が "A Monograph on Mr. William Sharp Mac Leay's Coleopterous Genus *Euchlora*" (Proc. Zool. Soc. London, VII, pp. 65-75, 1839) なる論文の中で (p. 70) Leyden の友 De Hean より送られた標本であるとされ、それに基づいて *Euchlora albopilosa* として新種記載された種である。産地は Japan とのみになっている。

Waterhouse の 1875 年に発表した "日本の鯉角類について" (Trans. Ent. Soc. London, Part. I. p. 71-116, pl. III) の中ではただ単に産地 Japan として種名のみ記録されている (p. 112, 属名は *Euchlora*)。

Lewis の "日本産甲虫目録" にも番号 1000 で *Euchlora* 属で記録されているが、全く産地は書いていない。

ところが Schoenfeldt, H. v. は "Catalog der Coleopteren von Japan mit Angabe der bezuglichen Beschreibungen und sicher bekannten Fundorte" (Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde, 40:31-204, 1887) の中で p. 109 に *Euchlora albopilosa*, Kiushiu, Hiogo として記録している。即ち本種が兵庫に産すると記録さ



兵庫県におけるアオドウガネ分布概念図
○ 5P ヤマトアオドウガネ

れたのはこの Schoenfeldt の目録が始めてになると考えられる。

E. Reitter は "Bestimmungs-Tabelle der Melolonthidae aus der europäischen Fauna den angrenzenden Ländern IV. Theil. Rutelini, Hopli & Glaphyrini" (Verh. Naturforsch. Ver. Brünn, 41, p. 28-158) の中で *Anomala* 属に移されると共に新亜属 *Euporchlora* を創設 (p. 64) 之に属せしめられた。

同時に日本産 *subsp. immarginata* を記載している (p. 65)。これは 後三輪・中條両博士の "日本産鞘翅目分類目録" (1939) では変種として扱っておられる (p. 41)。勿論現在はその様な扱いはしていない。

Arrow の 1913 年の "日本産鋸角類について" でも産地を Japan とのみで種名が出ているだけである (*Anomala* 属としている)。新島・木下両博士は名著 "こがねむしに関する研究報告 (第二)" で図説をされた。その中で産地に Hiogo がふくまれているが、之は本書がオリジナルでは無く前記 Schoenfeldt の引用だと考えられる。

戦前の図鑑類にも割合図説されている (新島, 1932. 神谷・安立, 1933. 加藤, 1933. 江崎, 堀, 安松, 1938)。そして沢田玄正博士は "ドウガネとその近似種" によって詳しくこのグループの検討をされた (関西昆虫学会々報, Vol. 12, No. 1: 41-49, 1942)。

前記新島, 木下両博士の論文で本州, 四国, 九州, 対島の分布が報告されたが岡本半次郎博士は済州島から記録され (Bull. Agr. Exp. Sta. Gov. Vol. 1, No. 2, 1924), 同時に南部, 中央部 朝鮮には大変多いとされている (p. 176)。朝鮮での分布状況に就いては金昌煥 "韓国昆虫分布図鑑, 第 2 篇" (1978) に詳しく図説されている (p. 348, pl. 35, sc 29)。

屋久島からは竹内吉蔵氏 (関西昆虫学会々報, No. 2, 1931), 神谷一男氏 (あきつ, Vol. 1, No. 3, 1938) が夫々記録している。

Medvedev の "Fauna U.S.S.R. X (3)" にも図説されている (p. 140-142, f. 24, 1949)。分布で日本は九州とのみになっている。

戦後も次のような原色図説がある。

伊賀正汎氏 (1955), 野村 鎮氏 (1963), 林 長閑博士 (1975), そして中島敏夫博士による詳しい図説がある (林業害虫としてのコガネムシ類, 1957)。

奄美大島とトカラ諸島にいるものに Schoenfeldt が *var. gracilis* として 記録したものが、現在では亜種として扱われアマミアオドウガネとされている。沢田博士は沖縄本島, 宮古島, 石垣島に産する亜種 *yashiroi* Sawada オキナワアオドウガネ を記載され基亜種との区別を記載された (東京農大農学集報, Vol. 2, No. 2, p. 279-280, 1950)。

野村 鎮氏は西表, 石垣, 宮古島産亜種 *sakishimana*, 与那国島産亜種 *yonaguniana* を共に記載された (Toho Gakuho, No. 14, 1964)。前者は後 Hateruma Is., Irabu Is., Shimoji Is.

にも分布することが報告されている (Entom. Rev. Japan, Vol. 22, No. 2, 1970)。

現在原名亜種の分布は本州、四国、九州、対馬、屋久島、種子島、トカラ諸島中之島、国外で済州島、朝鮮と言うことになると思われる。

野村氏 (1963) も林博士 (1975) も本州 (西部) と分布をしておられる。本州のどのあたりまで分布しているのだろうか。筆者の所有文献が貧弱なのでよくわからなかった。

大場信義氏等によってまとめられた "三浦半島のコガネムシ類" (Sci. Rep. Yokosuka Mus. No. 28, 1981) によると 横浜、多摩丘陵方面では普通であるが、三浦半島ではきわめて少いと (p. 33)。平野幸彦氏がまとめられた "神奈川県の甲虫" (1981) によるとアオドウガネの記録がなく、神奈川県でのアオドウガネとされているのはヤマトアオドウガネのようであるとされている。最近榎戸良裕氏は神奈川県城ヶ島での記録をされ、房総半島、伊豆半島、伊豆諸島には分布していないようだと言われている (月刊むし, No. 150, 1983)。

平山修次郎氏が東京井之頭産 (20-Ⅷ-1932) で原色図説されたもの (1933, 1940)、渡辺福寿氏が青森、宮城、岩手県産として記録されたもの (森林動物相調査報告、第一輯、金亀子科, p. 36-37, pl. 10, f. 20, 1937) で共にアオドウガネとされている種はヤマトアオドウガネのことらしい (沢田, 1942)。そうなると竹内誠一氏の岩手県の産もヤマトアオドウガネになるのかもしれない (岩手県甲虫誌, 1939)。

福井県からも美しい原色図でアオドウガネが記録されている (原色福井県昆虫図譜, pl. 9, f. 5, 1938) がこの図だけではヤマトアオドウガネかどうかは良くわからない。

新潟県からはヤマトアオドウガネは割合いるようだがアオドウガネは見られなかった (中根, 馬場, 1957., 樋熊, 1964., 馬場, 1972)。

兵庫県からの記録は 1887 年の Schoenfeldt による Hiogo 以後ほとんどなく、1933 年に関公一氏が御影町を記録されたのが日本人による県下での初めての記録になると思はれる (大上宇一氏の記録にはふくまれていないようである)。氏は 1934 年にも "大阪・神戸付近の金亀子虫" の中にも記録しているのであるが両方ともデータが全くついていない。従って後者の報告などは何処に分布しているのか全く見当がつかない。

1937 年には北村達明氏が出石郡神美村から記録されたが単に和名だけである。更に須磨からも記録されたがこちらもデータが無い。以上の記録は同定が出来ているとしてもどの様な状態であったのか全くわからない。記録としては大変不親切なものである。増田、橋本両氏も摩耶山麓を記録 "燈火に飛来するも稀" と記していてデータは無い (1941) (筆者の 1941 年に発表した報文も上記、記録によった)。

以上の記録もふくめて県下の記録と筆者の採集所有しているデータに基いて県下の分布を眺めて見

たい。

淡路島では洲本市安平町、先山、山武牧場の記録が堀田氏によってされている（1959, 1974, 1976, 1979）。筆者は神戸昆虫同好会の例会として岩屋で採集会が開催された時参加して海水浴場のそばの小高い山地で3♂♂, 2♀♀を採集（4-Ⅷ-1957）他にも割合いたのを目撃した。恐らく淡路島には可成り普通に見られる種だろうと考えている。

川西市は中田氏が大和東、能勢口駅を記録しておられ仲田氏の報文〔1978, 1982〕にも大和、笹部とある。このあたりには広くいるのではないだろうか。更に中田氏は宝塚市中山寺、芦屋市奥池を報告しておられる。

神戸市に入ってから前記の御影、摩耶山、須磨、西垂水の他に筆者は次のように採集している。ポートアイランド（25♂♂, 13♀♀, 5-Ⅸ-1983）（この中に1♂前脛節の外歯が全く無い、即ち前方が截断状になった変形のものがあった）。烏原（1♀, 3-Ⅹ-1976）、舞子（1♂, 11-Ⅷ-1982, 1♂, 1♀, 11-Ⅷ-1983）。従って神戸市内の海岸に近い所には広くいるようである。

明石市の明石公園では1♀, 18-Ⅸ-1976, 1♀, 10-Ⅷ-1977を採集している。この地にはヤマトアオドウガネも産する。飾磨郡雪彦山麓でも採集出来た（1♀, Ⅷ-1955）。さらに西へ行って赤穂市の天和の浜でも採集出来ている（1♂, 21-Ⅸ-1974）。隣接県であるがこの地よりやや西へ行った岡山県和気郡伊里中でも1♀を採集している（10-Ⅷ-1959）、この地も海岸に割合近い所である。こうして見ると海岸線にそった地域にはずーっと分布している種と考えられる。所が前にも記したように出石郡での記録がある他筆者の手許には氷上郡柏原で山本義丸氏の採集された1♂標本がある（31-Ⅷ-1956）。また高橋 匡氏は豊岡市での産を報じておられる（1975, 1981）。いづれも比較的山地帯のように思われる。強いて言えば豊岡市が海岸線に近いかと思われる。日本海に面した地域にもいるのではないかと思われるが、今の所記録がない。この様に見てくると山地帯での本種の産出はほとんど無いようで海岸線沿いに分布しており好塩性の種のように思われるがどんなものだろうか。

筆者の手許には加治木氏採集の屋久島産1♂標本があるが（15-Ⅶ-1933）、兵庫県産の標本に比して褐色味の強い緑色をしているが形態的の差異は認められなかった（小形）。

本種は7～9月に成虫は多く見られるようで猛暑の虫と言えそうであるが、烏原で採集したのは11月3日側溝でじーっとしていたのを採集している。生活史については見当らないように思われる。

ドウガネに就いて湯浅博士と遠藤氏によると（農事試験場彙報, Vol.3, No.2, 1938）、ドウガネの食餌植物は34科69種以上となっている（ドウガネの生活史並びに生態に関する文献は他にも大変多くある）。アオドウガネも相当多くの植物を食害すると思われるが（農林害虫名鑑, 1980では7種の加害植物名があげてある）、その害を大きく取り上げられた様な報文は見られなかった。何時

の日に問題になるかも知れないが（ポートアイランドでの採集は全部ハギに来ていたものであるが白い紙の上で展脚した所数匹のものからハギの花の色の薄紫赤色の体液を出したものが割合った。これを食していたようである）。

ところでこのアオドウガネに良く似た種のヤマトアオドウガネがいる。本種はArrow が新潟と朝鮮産で記載された種である（Ann. Mag. Nat. Hist. 8, Ⅷ, p. 401, 1913）。従来このArrow の記載した *Anomala japonica* は *A. viridana* (Kolbe, 1886) のシノニムとされてヤマトアオドウガネの学名は *A. viridana* が使用されていた。所が野村 鎮氏は *A. viridiana* とされているのは日本にいるものでなく朝鮮に産する *A. mongolica* に似た種で日本産のものは *A. japonica* として日本特産の種であるとされた（Ent. Rev. Japan, Vol. 21, No. 2, 1969）。

こちらの方が前にも記したように宮城、岩手、青森県あたりまで分布している種のようにあり（渡辺, 1937）、分布がより広いように思われる。野村氏は海岸近くに産するとしておられる（1963）。兵庫県下ではこちらの方がどうも少いように思われる（関西・中国地方では全般にアオドウガネより個体数が少いようである。お隣の岡山県では両種共少い種とされているがヤマトアオドウガネは真庭郡湯原町のような北部で採集されている。岡山県の昆虫, 1978. 蒜山の生物調査報告, 1973）。調査が不十分だからだとも考えられるが、今の所次の所で知られているのみである。

川西市多田（1♀, 19-V-1938, これは栗の花から採集した）。神戸ポートアイランド〔田中, 1983〕。明石市明石公園（1♂, 19-VI-1976, 1♂, 16-VI-1976, 1♂, 7-VII-1979, 1♂, 12-VII-1981. 明石公園にはアオドウガネと両方が得られる。この種の方が出現期が早いようである）。加古川市加古川畔（3♀♀, 24-VI-1955, H. Ishida leg.）。それと氷上郡〔山本, 1959〕の記録がある。今一つこちらの方の分布がよくわからない。大いに調べて見なくてはと考えている。

（Jan. 1984）

兵庫県未記録のオオキノコムシ

遠山雅夫

高橋(1983)によると32種のオオキノコムシが兵庫県から記録されている。筆者はこのリストに記録されていないベニモンムネビロオオキノコムシを採集しているので記録しておく。

Microsternus perforatus Lewis

ベニモンムネビロオオキノコムシ

2 exs., 23. VII. 1978

宍粟郡赤西

1 ex., 28. IX. 1979

宍粟郡赤西

出石郡糸井溪谷におけるマヤサン コブヤハズカミキリの記録

小田中 健

兵庫県摩耶山を模式産地とするマヤサンコブヤハズカミキリは、その後扇の山、城崎郡等で採集されているが、高橋[きべりはむし9(2), 27-28]によると最近の確実な記録がないようである。

筆者等は1983年10月3日京都府加佐郡大江山にて本種を多数採集し、更に後日当地より西兵庫県出石郡糸井溪谷にて採集を試みたところ、3頭採集出来たので報告する。

マヤサンコブヤハズカミキリ *Mesochthistatus furciferus* Bates

10-X-1983 1♀ 筆者採集, 2♂♂ 加藤敦採集

尚、当日スゲの葉上よりヤスマツケシタマムシ *Aphanisticus yasumatsui* Y. Kurosawa を多数得ているので併せて報告しておく。

10-X-1983 80 exs 筆者採集, 150 exs 加藤敦採集。

最後に、採集に同行され色々御教示下さった加藤敦氏及び浜田幹夫氏に感謝の意を表したい。

上ヶ原用水路のトンボ

田 中 稔

犬の散歩がてらに関西学院大学附近（西宮市上ヶ原一番町）でトンボ採集をしているが、ここには上ヶ原用水路（看板には1648年～1651年、仁川より関西学院裏まで引いた水を分水樋により上ヶ原新田、門戸、神呪、3村に分けた。とあり西宮市指定史跡となっている。）があり、その環境上サナエトンボ類がほとんどである。本科は羽化殻の採集が容易で、大体の発生数（雨に流されることもあるが）、発生ピーク、が分かりやすいので以下ノートより抜粋してみた。

カワトンボ *Mnais strigata* SELYS

少ない。透明型である。羽化殻は未発見。

ヤマサナエ *Gomphus melanops* SELYS

16 V 1982 羽化殻9

23 V 1982 羽化殻15

15 V 1983 羽化殻6

5月15日頃より羽化しはじめ、5月20日位がピークとなる。羽化殻の位置は、水面スレスレから30cm位まで。本種は羽化殻成虫共に、仁川キャンプ場附近の用水路に多い。

キイロサナエ *Gomphus pyri* SELYS

23 V 1982 羽化殻多数

12 V 1982 羽化殻41

19 V 1982 羽化殻6

5月20日頃より羽化しはじめ、5月下旬がピークとなる。羽化殻は水面スレスレより30cmまでの所に多い。ヤマサナエの羽化殻は本種より、太く、腹部第9節が短いので区別できる。1982年5月23日は、田植えの準備のため用水路の溝さらえをしていた。用水路には水がなく、近所の子供達がザリガニ、ドンコ採りに熱中しており、筆者も犬と子供を連れてザリガニ、ドンコ採り兼、羽化殻採りに来ていたため、用水路は子供、大人、犬で大賑いだった。キイロサナエの羽化殻は、用水路に多数ついていたが、9時頃でも羽化中の個体があり、水がないため溝底面の石、水草の上で羽化していた。道路上に積み上げられた用水路の砂、ドロ、ゴミには羽化失敗の成虫がヨタヨタし、若齢幼虫、終齢幼虫がモゾモゾと動き廻り、子供達に踏まれた幼虫があったりして毎年キイロサナエの羽化期に用水路の溝さらえが重なるので「キイロサナエ受難のシーズン」となり胸が痛む。しかし本種を始めて見てから4年になるが、発生個体数の変動はないようである。産卵は2回観察したが（1980年6月30日、1982年7月4日）単独で飛翔しながら（ほとんど滞空）流水上の50cm位より、やや尾端を曲げて水面に付ける事をせずに、バラバラと産卵していた。当地では、ヤマサナエより本種の方が

下流に生息する様である。

ダビドサナエ *Davidius nanus* SELYS

7 VI 1980 羽化殻 1

本種は仁川ピクニックセンター附近に多い、おそらく流されて来たものと思う。

オジロサナエ *Stylogomphus suzukii* OGUMA

26 VI 1982 羽化殻 5

4 VII 1982 羽化殻 1

11 VII 1982 羽化殻 2

水面スレスレで見られ、小型であるが白っぽく見えるので発見しやすい。仁川の堰堤の淵で羽化殻、生虫を見るが、これが本来の姿であろう。

オナガサナエ *Onychogomphus viridicostus* OGUMA

19 VI 1982 羽化殻 7

26 VI 1982 羽化殻 22

4 VII 1982 羽化殻 4

11 VII 1982 羽化殻 3

羽化殻は、体の半分が水につかっている。毎年用水路の限られた場所で見られ、成虫は甲山森林公園で1980年7月13日に1♂を採集したのみ。

コオニヤンマ *Sieboldius albardae* SELYS

19 VI 1982 羽化殻 4

26 VI 1982 羽化殻 1

水面上50cm位の所に見られる。仁川では石の上に多く、成虫も8月上旬に多い。

オニヤンマ *Anotogaster sieboldii* SELYS

19 VI 1982 羽化殻 5

26 VI 1982 羽化殻 3

水面より遠く離れ、とんでもない所についている事が多い。普通に見られる。

ミルンヤンマ *Planaeschna milnei* SELYS

13 VII 1980 羽化殻 4

用水路より1m以内の草、枝に発見出来るが、採集しにくい。しかし当地においては、ヤンマ科の中で一番多い種である。

コジボツヤンマ *Boyeria maclachlani* SELYS

6 VII 1980 羽化殻 4

27 VII 1980 羽化殻 3

用水路にはえた草で発見したもので、羽化殻の位置はミルンヤンマと同じである。成虫は仁川に多い。

コヤマトンボ *Macromia amphigena amphigena* SELYS

30 VI 1980 羽化殻 12

19 VI 1982 羽化殻 6

橋の天井面など暗い所で、羽化殻が見られる。普通に見られる。

オオシオカラトンボ *Orthetrum triangulare melania* SELYS

6 VI 1982 羽化殻 2

12 VI 1982 羽化殻 12

19 VI 1982 羽化殻 6

本種は流水、止水共に生息しており、羽化殻は水面上 20cm~50cm位の所に最も多く、当地においては最も多いトンボである。

参 考 文 献

- 1) 石田昇三(1969) 原色日本昆虫生態図鑑Ⅱトンボ編 保育社
- 2) 松本健嗣(1982) 神戸市周辺の蜻蛉目、きべりはむし(第10巻第2号): 2-8.

西宮市内におけるヒメコブヤハズ カミキリの採集記録

新 家 勝

県下におけるヒメコブヤハズカミキリ *Parechthistatus gibber gibber* Bates の分布については本誌第9巻第2号に紹介されているが、採集記録は意外に少ないようである。少し古い記録であるが、西宮市内における筆者の採集例を報告させていただく。

Ⅸ. 23. 1974 西宮市鷺林寺、標本は筆者保管

宝塚市清荒神のチョウ（追録3）

加 藤 信一郎

秋に入ってクロコノマチョウ、ヒメアカタテハが新たに確認されたので報告する。

1. クロコノマチョウ *Melanitis phedima* Cramer

1♀, 18-9-1983.

採集場所は旧街道より北の、荒神川西岸を少し入ったナラ、クヌギなどの雑木林で、樹木の腐ったほらに静止していたものである。

きわめて新鮮な個体で、1. 前翅端の黄色斑は広くて赤みが強く、2. その中にある黒斑内の2白点の中、上部の白点は外縁寄りに位置する。3. 前後翅端外縁は強く突出する。4. 裏面は淡茶褐色で、前翅に2本、後翅に1本の縦條をもつ。これらから明らかにウスイロコノマチョウと異なり、クロコノマチョウの秋型と同定される。採品は後翅裏面外縁の小白点が6個完全に散現している。

本種は熱帯系で、九州・四国・静岡以西の本州に分布する。近畿では稀にしか見られない。宝塚市における記録としては、筆者の資料によると、1955年8月5日宝塚付近、1959年7月15日同市内長寿ヶ丘で採集された古い記録があるのみである（東 正雄, 1965, 京阪神の動物, P20, 21）。採品は偶産種と思われるが、採集地周辺は、ジュズダマ、ススキなど食草には事欠かない環境にあるので、今後も調査を続けたい。

2. ヒメアカタテハ *Cynthia cardui* Linnaeus

1♀, 23-11-1983.

採集場所は阪急宝塚線と交差する荒神川西岸沿いの畑地である。当地では初の記録であるが、市内さらには隣接する伊丹市昆陽池付近でも観察・採集されている。

いずれも宝塚市立高司中2年谷友晴君が採集し所蔵している。

これにより清荒神で確認されたチョウは44属56種となる。

なお本年も春先からナガサキアゲハが発生し、観察頭数は昨年以上で、自宅庭にもしばしば飛来するようになったが、依然♀は観察できなかった。又9月10日ダイミョウセセリ1♀を自宅裏の小道脇で採集した。第3化の採品は始めてである。

宝塚市内におけるカメムシ 2 種の 採集および目撃記録

新 家 勝

エビイロカメムシ *Gonopsis affinis* Uhler の県下における分布については、本誌第 9 巻第 1 号に紹介されているが、宝塚市内のものはない。また、ウシカメムシ *Alcimocoris japonensis* Scott は北隆館発行原色昆虫大図鑑Ⅲに よれば稀なものとのことである。そこで、これら 2 種のカメムシについて宝塚市内における採集および目撃記録を報告させていただく。

1. エビイロカメムシ

- (1) Ⅺ. 12, 1979 宝塚市小浜 1 丁目、武庫川堤防、採集、標本は筆者保管。
- (2) Ⅶ. 22, 1983 宝塚市検見山、目撃。
- (3) Ⅷ. 7, 1983 宝塚市小浜 1 丁目、武庫川堤防、脱皮直後の終令幼虫目撃。

以上いずれもススキの葉上にいるのを採集および目撃した。

2. ウシカメムシ

- Ⅺ. 3, 1983 宝塚市切畑、ヒノキの樹幹で採集、標本は筆者保管。

宝塚市売布でエゾナガヒゲカミキ リを採集

小田中 健

筆者は宝塚市売布が丘の自宅 2 階の窓にてライトトラップによる夜間採集を試みていたところ、北摂及び阪神間で記録を聞かない本種を得ているので報告する。

エゾナガヒゲカミキリ *Jezohammus nubilus* Matsushita

1♂ 26-Ⅷ-1983 筆者採集保管

尚当地一帯山系ではケブカマルクビカミキリ, *Atimia okayamensis* Hayashi を多産することを併せて報告しておく。

鳴 呼 舞 子 ビ ラ

— シルビアシジミの産地消滅 —

勝 屋 潤

舞子ビラ（神戸市垂水区）は海岸から水平距離約100 m、海拔約30 mの小高い丘に建つ結婚式場（ホテル兼）である。最近になって新館が建てられ駐車場も完備されたが、建物周辺の植物は保護され、松を主体とした舞子公園の中に位置している。その裏（東側）には約200㎡の空地があり、ここにはアラカシ、イヌビワ、クヌギ、コメラ等の樹木で囲まれた小さな草原となっていた。一面にミヤコグサとシロツメグサが咲き乱れ、モンキチョウやウラナシジミが飛びかい、上空をモンキアゲハが飛んでいた。

1982年10月9日、私は当時の自宅から歩いて30秒とかならないこの草原にミヤコグサを採取に行った際（当時尼崎市産のシルビアを飼育していた為、その食草として採取）シルビアシジミが発生しているのを確認した。神戸市垂水区にシルビアシジミが棲息しているというのは別に不思議でもないが、こんな海辺によくいたものだと思ったのであった。この日はシルビアシジミ2♂1♀とミヤコグサより8卵及び4幼虫（2～4令）を採集した。

またアラカシで発生していたムラサキシジミやクズに産卵中のウラナシジミ及びウラギンシジミも多数確認できた。

翌10月10日夕刻、再度訪れた際はシロツメグサで吸蜜中のツマグロキチョウ（秋型♂）や上空をゆっくりと飛翔中のアサギマダラを確認した。この2種に関しては近くに食草がない為、恐らく六甲山系からの飛来個体と思われる。この日もシルビアシジミは1♂のみであるがミヤコグサで吸蜜中の個体を確認できた。

周年経過（発生回数）は1983年に春から調べて尼崎産と比較するつもりでいた矢先、1981年1月より高年マンション建設の為この空地一帯にブルドーザーが入り込んだ。知らせを聞いた時には既に「立入禁止」となり、足を踏み入れる事もできず、わずか2日間でミヤコグサはもちろん、附近のアラカシ、イヌビワも全てなぎ倒され、1本の草木もなくなってしまった。

その後、3月に私は西区へ転居した為、この地を訪れていない。後に近くの舞子墓園を探索したがシルビアはおろかミヤコグサさえ発見できなかった。

（神戸市西区美穂ヶ丘3-3-17-404）

メスアカムラサキ神戸市で発生

勝 屋 潤

1982年10月10日、神戸市垂水区東舞子町にて地上約10mを飛翔するメスアカムラサキ1♀を目撃した。その時はそれがメスアカムラサキであるかどうか疑わしく、何か他種との見違いである可能性が強いと考えていた。

しかし、10月17日に垂水区東舞子町で人家の庭に自生しているスベリヒユよりメスアカムラサキ2令幼虫3exsを発見した。(1982-11-7 1♀羽化, 11-8 1♀羽化, 11-10 1♀羽化)
10月24日には垂水区五色山町にてやはりスベリヒユより3令幼虫2exsを発見した。(1982-11-11 2♀羽化)

(羽化した個体は全て♀であった)

尚、メスアカムラサキの産卵性からすれば、もっと多くの幼虫が発見できたはずであるが、当地においてはスベリヒユは各地に自生し、また1ヶ所当りの株数が少ないので、1株当りの産卵数が少なかったのか、或いは多数の幼虫がいたにもかかわらず、天敵などにより食されたのかは不明であるがもっと広範囲にわたって調べるべきであったと思う。

神戸市垂水区東舞子町のナガサキアゲハ

勝 屋 潤

1982年は神戸市にもナガサキアゲハは非常に多く筆者は幼虫を採集しているので記録しておく。

1982-10-2 神戸市垂水区東舞子町。3令幼虫1ex. 4令幼虫4exs。(いずれも栽培ミカンより)(1982-10-15, 2♂羽化, 1982-11-8, 1♀羽化, 2頭は寄生)。尚成虫は8月下旬から10月中旬にかけ多数目撃した。

尚1983年は極端に少なく、8月27日に同地で2幼虫(2令)を確認したのみである。

県 関 係 文 献 紹 介

- 河上仁之, 猪名川生物目録, 昆虫. 地域研究いたみ 第12号, pp.132-135, 1982.

一寸と古い文献なのだが, 伊丹博物館の坂根隆治氏より猪名川の桑津橋から軍行橋付近で昭和53年から55年にかけて生物調査を行った結果をまとめられた上記別刷を御恵送頂いた。昆虫33科87種のリストが出ているが普通種ばかりであり, データも無い単なる目録でその点大変淋しい。

- 生物甲陽 №14 (1983年12月刊), B5, 96 p.

甲陽学院高校生物部が2年に1回出版している部誌である。このように高校生物部で発行されている部誌のようなものは県下でも多くあるはずであり, また夫等には文献記録として重要な報文も発表されるのであるが, 何等かの関係が無いと入手若くは見る機会が得られない。こう言った学校関係の文献が一般にも見る方法が出来れば助かるのだが —。この生物甲陽にも芦田 久氏がカミキリムシを中心とした参考になる報文を3篇発表しておられる。

同 好 会 誌

- 兵庫陸水生物 (兵庫陸水生物同好会々報) Vol.3, №3 (Oct. 1983). №12 (Jan. 1984).

- IRATSUME, №7 (但馬むしの会々誌) (Sept. 1983).

(T)

編 集 後 記

- 今年の冬は寒い冬でした。冬になるたびにシベリアで過した2度の冬を思い出し何んだこの位の寒さと言いながら年ですか年々骨身にこたえます。皆様方にはお変り御座いませんでしたでしょうか。
- 本号には岸井 尚 氏に御無理を申しあげて「兵庫県のコメツキムシ」をまとめて頂きました。まだまだ県下には未調査地も多く、また充分な調査も実施されていないので、岸井氏も述べておられるように隣接県で記録があっても兵庫県下に記録の見られない種も多くあるようです。本報文を基礎により充実したファウナ解明に役立てゝ頂ければと思います（著者に御了解頂いたとは申しまして都合で分割発表させて頂いたことを御詫びします）。
- お陰さまで御投稿頂きました数篇の報文が次号に送らせて頂くようなことになりました御了承下さい。
- 諸物価の値上げ攻勢です。地方同好会の運営は益々困難になってくるように思われます。何処まで息が続くか心もとない次第です。
- 次号は11月発行を予定しています。御投稿をお願い致します。 (T)

きべりはむし 第12号第1号

昭和59年5月15日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎 方

振替 神戸7-26646

印刷：(株) 文 尚 堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
